

日本語意見文作成指導におけるスキーマの有用性

—中国人学習者を例に—

王 偉

広州南方学院*

概要：本稿では、筆者はスキーマ理論による統制群の授業実践を行い、その授業効果を考察する。授業の各段階で「構成スキーマ」、「表現スキーマ」と「内容スキーマ」を導入したのち、意見文の作成の過程における二グループの点数等を統計し、統制群にアンケート調査を実施した上、意見文作成指導におけるスキーマ理論の有用性を検証する。

キーワード：スキーマ、日本語意見文、有用性、授業効果

Usefulness of Schema Theory In Japanese Arguments Writing

—Chinese Learners As An Example —

Wei WANG

Nanfang College Guangzhou

Abstract: *This paper focus on finding out the class effect of Japanese Arguments Writing which oriented by schema theory. "Structural schema", "language schema" and "Content schema" are subdivided into each stage of the lesson. After that, I also collected statistics on scores in the process of Arguments composition writing and conduct a questionnaire survey among the control group. Lastly, the aim is to verify the usefulness of schema theory in teaching Japanese Arguments writing.*

Keywords: *Schema; Japanese Arguments ; Usefulness; Class Effect*

* 本研究は中国外語教育基金(課題番号：ZGWYJYJJ11A146)および広州南方学院博士研究助成金(課題番号：2020BQ14)の助成を受けて行った。

1.はじめに

これまでの数多くの先行研究からでも分かるように、外国人を対象にした日本語教育における作文指導を行う際、いくつかの困難に直面するのは予想されることである。まず挙げられるのは語彙や文法の誤用の問題である。初級の学習者はもちろん、中・上級の学習者の作文に語彙や文法などの問題がそれほどの改善が見られていない。(大塚・林 2010, 大山等 2016)しかし、外国人日本語学習者にとってもっとも困難なのは語彙と文法からなる言語表現というより、文章の構成や段落の順番などの形式の問題や文章の構成と言えよう。(有吉 1997, 田代 2009)

これらの問題は伝統的な教授法の非効率あるいは非科学的なところに起因されると、多くの研究で確認された。(有吉 1997, 鈴木・内川 2013, 山本 2015)この現状に対して、日本語教育者らはさまざまな革新的な教授法を授業の実践に取り入れ、多くの成果を上げた。本研究で取り上げられる認知言語学範疇に属される「スキーマ理論」は近年現れた新しい研究方法の一つである。

1.1. 意見文の定義

意見文とはある事柄や問題について自分の意見を述べ、読み手を理解させ納得させることを目的とした文章である。詳しく言えば、何かの事物や出来事や思想などについて自分が考えぬいた結果を述べるもので、結論・立場の主張・提案・解決策・反対論などの形となって表明されるもののことである。なお、中国人の日本語学習者の日本語の「意見文」に対する認識は多少異なる。前川(2022)では「意見文=議論文」という認識は、意見文に対する認識の一部をとらえたものであり、実際には意見文における「意見」と議論文の「議論」には明確な差異があり、後者においては書き方の見方・観点・論拠や特定の表現方法が必須とされている」とされる。それは、つまり小野田(2019)の主張した *argumentative writing* の場合には異なる立場の読み手や想定される反論を意識する必要があるのに対して、*opinion writing* の場合はそれらを想定する必要性は必ずしもないのであるにある。つまり、前者は中国の国語教育における「議論文」で、反対に後者は日本語教育における「意見文」に等しい。そこで、本論で論じられた授業実践で用いられたのは中国人の国語教育の「議論文」ではなく、日本語教育における意見文の定義とする。

1.2. 日本語意見文作成指導の必要性

小野田は学校教育における意見文作成指導の重要性について詳細に研究した。意見文指導の教育は初等教育から高等教育まで継続して実施されて、その延長線に学術論文や卒業論文があると主張した。領域や作法に違いがあるが、自分の主張の正当性や妥当性をいくつかの理由によって論証する能力は必要となる。また、社会生活を営むという長期的な視点からも、たとえば要望書や企画書の作成等の様々な場面においても意見文作成からみた「発信力」の養成が重要視されている。つまり、学校教育における意見文作成指導には重要な意義があると言えよう。

一方、日本語学習者の意見文作成指導は日本語教育の四技能の一つである「書く」の一環として、言うまでもなく外国人学習者の日本語総合応用力を測る指標となるだろう。ただし、意見文指導にあたる現場の教師ら、とりわけ日本人教師にとって、日本語教育における意見文作成指導は日本人を対象とした国語教育における意見文指導とは相当な差異があるため、様々な指導の課題に直面せざるをえないのである。

1.3. 意見文作成指導におけるスキーマ理論の応用

作文授業におけるスキーマ理論の有用性について、すでに杉本(1991)、渡部(1992)、村岡等(2009, 2010)、村岡(2016)、王(2022)の研究が存在する。この中、王は日本語作文授業の実践に基づいて「形式スキーマ」、「言語スキーマ」と「主張スキーマ」を細分化し、最後に受講者のアンケートやインタビュー調査を通じてスキーマ理論の有用性を実証した。しかし、王の論文でも言及しているように、異なるジャンルによってそれぞれスキーマ理論を用いた授業効果はまだ不明である。本稿では意見文を例に作文授業におけるスキーマ理論の有用性を検証する。

ほかに意見文の指導に関するスキーマあるいは「スキーマ」に相当する「型」の研究が数多くある。杉本、渡部とも意見文作成における一つのサブスキーマ、すなわち「説得スキーマ」を例に、実験や授業調査を通じてその有用性を確認した。清道(2010)では高校生を対象にした意見文指導において、「型」を提示することの効果を検討した。その結果、実験群は対象群より意見文要素を満たした文章が多くて、しかも内容の評価も高かったとのことである。清道は意見文作成指導の際、意見文「型」を提示することにより、高校生の書く文章は量的および質的に充実したものとなるということが示されたと結論づけた。山本では「型」を事前指導した意見文とその後、全く事前指導をしなかった意見文を比較した結果、後者では六割の学習者が「型」を使うことができていなかった。それらの文章は、構成、接続表現が不十分なため読み手にわかりにくいものとなり、「型」を使うことができた学習者との評価の差も開いた。「型」を使うことができない学習者はその効果について理解が浅く論理的に考えることが苦手であった。そのため、事前指導では学習者のレベルに合わせ「型」の効果についての理解度に注意しながら指導すべきである。また、より「型」の効果を持続させるため練習の回数を重ねることが重要であると結論づけた。

清道や山本が言及した意見文指導における「型」がスキーマに意味違いが、いずれも文章構成スキーマのみに注目し、内容スキーマや表現スキーマの研究がまったく触れていない。そこで、本論では筆者の実際に行った意見文作成授業で獲得したデータや情報に基づいて、中国人学習者の意見文作成指導におけるスキーマの有用性を明らかにしようとする。

2. 授業の実践および考察

2.1. 授業の概要

以下、筆者が担当している日本語作文授業の概要を説明する。

- ① 授業名：日語基礎写作Ⅱ・日語応用写作
- ② 受講対象：日本語専攻の三年生の学生 50 名
- ③ コマ数：週 2 コマ(1 コマ 40 分)×18 週
- ④ 使用教材：『基礎日語写作教程』Ⅰ・Ⅱ
- ⑤ 授業方式：対面授業

表1 「日語基礎写作Ⅱ」の授業構成

| 内容 | コマ数 |
|-------------|----------------|
| ユニット 1: 紹介文 | 2 コマ×3 回= 6 コマ |
| ユニット 2: 説明文 | 2 コマ×3 回= 6 コマ |
| ユニット 3: 感想文 | 2 コマ×5 回=10 コマ |
| ユニット 4: 報告書 | 2 コマ×3 回= 6 コマ |
| ユニット 5: メール | 2 コマ×3 回= 6 コマ |

表2 「日語応用写作」の授業構成

| 内容 | コマ数 |
|--------------|----------------|
| ユニット 1: エッセイ | 2 コマ×4 回= 8 コマ |
| ユニット 2: 意見文 | 2 コマ×4 回= 8 コマ |
| ユニット 3: レポート | 2 コマ×5 回=10 コマ |
| ユニット 4: 論文 | 2 コマ×3 回= 6 コマ |

授業が前期と後期に分かれている。年間を通して九つのジャンルの作文の授業を行っている。ただし、後期のユニット 4 の論文の授業のみが、卒業論文の準備段階と捉え、論文の基礎を中心に授業を展開し、学生に課題を課さないようにしている。

2020 年度入学の学生を対象とした日本語作文授業の指導法の徹底的な変更を試みようとした。しかし、コマ数の制限もあって、今回は意見文のみを対象にして授業実践を行った。その試しとなる感想文は 2022-2023 年度の下半期に実施された。

2.2. スキーマ理論を用いた意見文授業の実施概要

筆者は 50 名の受講者をそれぞれ 25 名「統制群」と「非統制群」に振った。両群とも「大学院に進学するか」のテーマで、学生にどちらかの立場を明確にした上で、その理由を含めて 300 字以内の意見文を書かせるという授業内容であった。なお、学生には今回の実践の趣旨を説明して了承してもらった。

「非統制群」にはスキーマを提示せずに前年度どおりに授業を行った。「統制群」には、最初の授業からスキーマを提示して学習させた。四週間にわたる意見文授業において、文章を書かせ、三つのスキーマを別々に分けて意見文の学習・作成過程状況を観察しようとした。一回目の授業では好文と悪文を読ませ、好文の構造を分析させた。二回目の授業では好文の内容スキーマの導入を行い、主に学生に「主張スキーマ」を習得させ、そして練習させた。三回の授業の内容は好文の「表現スキーマ」の学習そして学生の意見文のテーマ「大学院に進学するか」を提示し、それに関連する表現スキーマをピア活動で行わせ、宿題を残すということであった。四回の授業ではグループ内の相互評価活動を設け、いままで習得した三つのスキーマを喚起させ、それぞれの文章における三つのスキーマの活用状況を確認してもらった。最後に、宿題として修正版を教師の提出し当該ユニットの授業を終わらせた。この四回にわたる授業の流れは下図のようである。

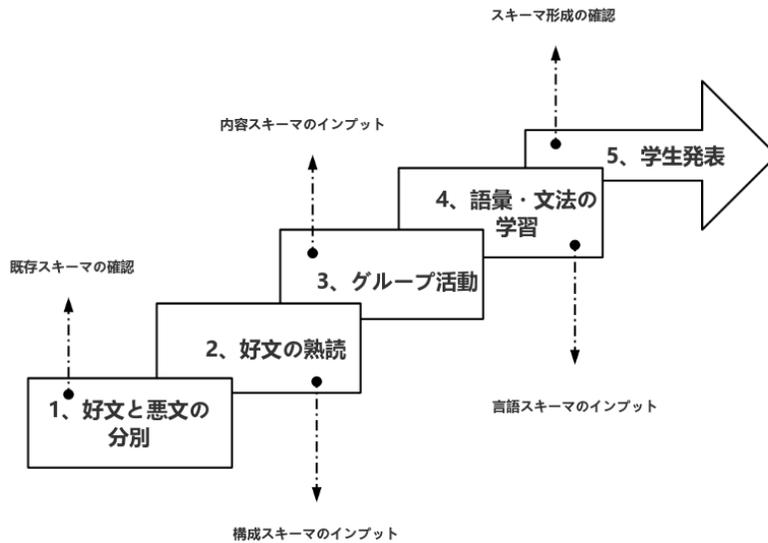


図1 スキーマ理論に基づく意見文の授業進行図(王 2022 に基づいて作成)

四回目にわたる授業の三つのスキーマの喚起・習得の具体的な作業は下図の通りである。



図2 スキーマ理論に基づく意見文の授業における教学活動(著者作成)

以下、スキーマ別に具体的にどのようにスキーマを導入し、そして実践させたのかを述べる。

2.2.1. 構成スキーマ

図2のように、二回目の授業以降に、以下の構成スキーマを学生らに提示し、そして異なる課題を宿題として練習させ、このスキーマを身に着けようとした。

- ①意見の表明「わたしは...と考える」
- ②理由の論述「その理由は、まず...次に...また...最後に...」
- ③反対立場の想定とそれへの反論「確かに...という意見もあるが、しかし...」
- ④まとめ「つまり...」

また、四回目の授業におけるピア活動(同グループ内の添削作業・相互評価活動)において、教師が事前に評価対象の構成スキーマの使用をリマインドさせ、意識的に構成スキーマの応用状況を喚起させた。

2.2.2. 表現スキーマ

ブレインストーミングによる発散思考を経て、学生に言語組織の作業に取りかからせた。そこで、マインドマップというツールが思考を整理し論理化する機能があると想定し、個々の学生にマインドマップを完成するよう指示を出した。以下、ある学生が完成したマインドマップを例に挙げよう。

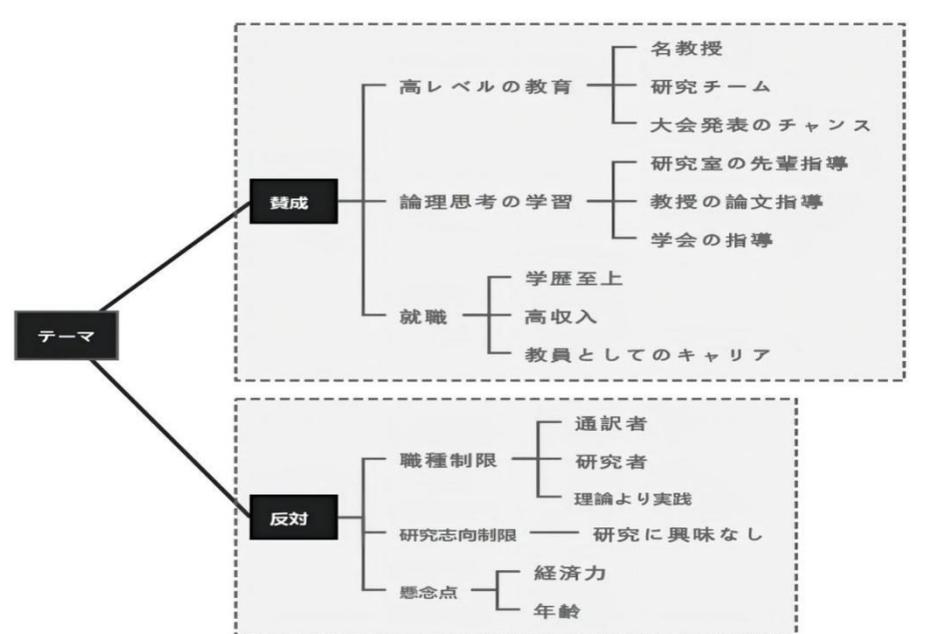


図3 ブレインストーミング法による表現スキーマの例

2.2.3. 内容スキーマ

この部分においては主に第2回目の授業で提示された関連テーマ「大学院に進学」に関する背景知識の事前調べや学生による社会調査の実施で授業を進めた。具体的には、1回目の授業の終わりごろに大学院進学の有利なところと不利なところを宿題として学生に課すと同時に、10人を対象にインタビュー調査やほかの形の調査を学生に命じた。そして、2回目の授業の際、ピア活動グループ内で情報共有で入手した内容スキーマを完

日本語意見文作成指導におけるスキーマの有用性—中国人学習者を例に—
成させた。

また、ここでもう一つ重要なサブスキーマの学習が必要とされており、すなわち「主張スキーマ」である。

伊集院・高橋（2010）では意見文課題を用いて、日本語母語話者と日本語学習者から収集した日本語作文における「主張」を2名でコーディングし考察している。収集した作文をデータベース化し、分析者2名で「主張」「根拠」「譲歩」などの文機能コーディングを施し、「はじめ」を第1段落、「おわり」を最終段落、「なか」はそれ以外の段落とし、主張が明示された段落によって文章構造の型を分類している。また、日本語母語話者の意見文は「はじめ」と「おわり」に主張を置く頭尾型が60%であり、「（背景的情報）主張→根拠→主張」という流れで意見文を構成するものが基本であると述べている。また、伊集院らの研究で、中国人や韓国人の日本語学習者に以上のような構成をインプットして習得させることは可能だと証明された。伊集院・高橋では意見文課題を用いて、日本語母語話者と日本語学習者から収集した日本語作文における「主張」を2名でコーディングし考察している。収集した作文をデータベース化し、分析者2名で「主張」「根拠」「譲歩」などの文機能コーディングを施し、「はじめ」を第1段落、「おわり」を最終段落、「なか」はそれ以外の段落とし、主張が明示された段落によって文章構造の型を分類している。また、日本語母語話者の意見文は「はじめ」と「おわり」に主張を置く頭尾型が60%であり、「（背景的情報）主張→根拠→主張」という流れで意見文を構成するものが基本であると述べている。また、伊集院らの研究で、中国人や韓国人の日本語学習者に以上のような構成をインプットして習得させることは可能だと証明された。

王の研究でも行われたように、2名の学生に「大学院進学するか」という課題を課した。その結果、事前に「説得スキーマ」をインプットした学生とそうでない学生の作成した意見文の内容の論理性にはかなりの差がある。

しかし、伊集院・高橋も王の研究も個別の学生に限られている。意見文作成指導におけるスキーマの有用性を証明するには、より豊富な実践データが必要であろう。そこで本研究では50名もの学生を研究対象にして授業実践を行い、統制群が非統制群より遥かに論理性のある文章を作成できるということが統計データで証明された。

2.3. 実施の結果

実施後、日本人教師一名に次の表に沿って採点するように依頼した。

表3 スキーマ別の意見文の3段評価表

| カテゴリ | 点数 | 評価基準 |
|--------|----|-------------------------------------|
| 構成スキーマ | 3 | 意見文の「主張スキーマ」を使って、適切な段落構成である。 |
| | 2 | 意見文の「主張スキーマ」を一部使って、ほぼ適切な段落構成である。 |
| | 1 | 意見文の「主張スキーマ」をまったく使っていない。段落のバランスが悪い。 |
| | 3 | 適切な接続表現が使われ、段落内、段落どうし全体の内容の |

| | | |
|--------|---|--------------------------------------------------------|
| 表現スキーマ | | まとまりがあり、論理的につながっている。 |
| | 2 | 段落内では論理的につながっているが、段落どうし全体のつながりに欠けている。 |
| | 1 | 適切な接続表現が使われず、単文の羅列となっている。 |
| 内容スキーマ | 3 | 自分の経験や具体的事例等を根拠として、適切な理由を示して、説得力がある。 |
| | 2 | 自分の意見は述べられていても、理由が曖昧、主観的で説得力に欠け、形はあっても実質的に機能せず、不十分である。 |
| | 1 | 主観的意見のみを理由としている。意見がテーマから逸れている。 |

つまり、三つのカテゴリーは三つのスキーマとなっており、それぞれに三段評価の詳細な基準を設けた。最高点数は3点に設定し、最低点数は1点に設定した。作文の満点は9点にした。

四回目の授業を終え、日本人教員にグループを分けずに採点してもらい、採点が終わって、著者が全体の統計を行うという流れである。二つのグループの各スキーマにおける平均点数等は以下のとおりである。

表4 全体の統計結果表

| 組 | 平均字数 | 平均点数 | 最高点数 | 最低点数 |
|------|------|------|------|------|
| 統制群 | 542 | 8.2 | 8 | 5 |
| 非統制群 | 511 | 6.7 | 8 | 3 |

以上の表4でもわかるように、スキーマを授業に導入した群は平均字数や平均点数などにおいてすべて高い数字を呈している。特に、平均点数においては1.5もの差があり、意見文作成指導におけるスキーマ提示の効果がうかがえるのではなかろうか。

表5 スキーマ別の統計結果表

| スキーマ名 | 統制群 | 非統制群 |
|--------|-----|------|
| 構成スキーマ | 2.8 | 2.0 |
| 表現スキーマ | 2.7 | 2.5 |
| 内容スキーマ | 2.5 | 2.2 |

表5では、二つのグループにおける三つのスキーマ別の得点が表示されている。三つのスキーマとも、統制群の方が非統制群より高い点を獲得したが、「構成スキーマ」における点数の差が0.8もあった。

また、各スキーマの導入の必要について統制群の25名の学習者を対象にアンケート調

日本語意見文作成指導におけるスキーマの有用性—中国人学習者を例に—
 査を実施した。結果は以下のとおりである。

表6 統制群を対象にしたアンケート調査結果一覧表

| スキーマ名 | 大変必要 | 必要 | どちらとも言えない | 必要ない |
|--------|------|----|-----------|------|
| 構成スキーマ | 25 | 0 | 0 | 0 |
| 表現スキーマ | 20 | 2 | 3 | 0 |
| 内容スキーマ | 18 | 4 | 3 | 0 |

上の表から、中国人日本語学習者にとってスキーマ導入の必要性が確認された。まずは、「構成スキーマ」に対して学習者全員は大変必要と評価した。それは中国人学習者が国語教育の段階から「型」に基づいた作文の教授法がすでに浸透したことに関連していると思われる。実際、中国人日本語学習者は日本語の「意見文」を中国の国語教育における「議論文」と捉える傾向が前川の研究では明らかにされた。次に、「表現スキーマ」においても九割ほどの学習者がある有用性を認めた。むろん、表現の学習は日本語四技能のどの部分においても重要であるが、作文における表現スキーマの形成は単に表現の正確性を強調するだけでなく、表現の豊かさや修辞法の習得がなおさらである。この点については鈴木・内川で明らかにされた。最後に、「内容スキーマ」に対して、同じく九割の学習者が肯定的な態度を表明した。意見文における「内容スキーマ」の提示および習得の中、「主張スキーマ」というサブスキーマが大きな役割を果たしている。それは意見文の評価基準のなかで論理性あるいは説得力が大きな割合を占めているからである。

3. まとめと今後の課題

筆者が中国の日本語学習者の三年生を対象に、統制群と非統制群に分けて、それぞれスキーマ導入と非導入の教授法で日本語意見文の授業を実施した。各段階において、「構成スキーマ」や「表現スキーマ」や「内容スキーマ」などを学生に提示してから習得させようとした。教師の教授、総合評価などのグループ活動を経て、最終的に学生が作成した50本の作文を日本人教師に判定してもらったところ、統制群は三つのスキーマにおいても作文の平均字数においても平均点数においても非統制群より優れていることが判明された。また、統制群の25名の学生を対象に実施したアンケート調査で学生の作文におけるスキーマ導入に対する評価も肯定的であった。つまり、意見文の作成指導において、スキーマの導入が有効であるがデータで証明された。

しかし、今回の授業実践では、コマ数の制限で意見文のみ実験対象に選択した。ほかの作文のスタイル、例えば紹介文や説明文や感想文などの文章の実践はまだされていない。つまり、スキーマの導入の汎用性はいまだ懸念されるものである。ほかに、レポートや論文のような専門的文章の場合、スキーマの導入は日本語作文授業にどれほどの効果をもたらせるのかも不明である。今後、異なるジャンルの作文実践においてのスキーマの導入が必要とされる。つまり、その汎用性は今後の研究課題となる。

参考文献

- 伊集院郁子・高橋圭子 2010 「日本語の意見文に用いられる文末のモダリティー日本・中国・韓国語母語話者の比較」 『留学生日本語教育センター論集』 pp. 13-27。
- 王偉 2022 「スキーマ理論を用いた日本語作文授業の効果について」 『東アジア教育研究』 Vol. 14, pp16-28。
- 大塚薫・林翠芳 2010 「中上級レベルの日本語学習者の作文教育 一意見文にみる語彙・漢字使用及び誤用の分析結果を踏まえて一」 『高知大学総合教育センター修学・留学生支援部門紀要』 第4号, 47-66。
- 小野田亮介 2019 「学校教育における意見文産出指導」 『教育心理学年報』 第58号, pp. 185-200。
- 大山浩美・小町守・松本裕治 2016 「日本語学習者の作文における誤用タイプの階層的アノテーションに基づく機械学習による自動分類」 『自然言語処理』 第23号, pp195-225。
- 清道亜都子 2010 「高校生の意見文指導における『型』の効果」 『教育心理学研究』 Vol. 58, pp361-371。
- 杉本明子 1991 「意見文産出における内省を促す課題状況と説得スキーマ」 『教育心理学研究』 第39巻, 第2号, pp. 32-41。
- 鈴木一史・内川美佳 2013 「意見文作成における語彙および文型提示の教育的効果」 『茨城大学教育実践研究 Vol. 32, 17-31。
- 田代ひとみ 2009 「読み手の評価別に見た日本語学習者の意見文の問題点」 『横浜国立大学留学生センター教育研究論集』 Vol. 16, 75-97。
- 前川孝子 2022 「中国人日本語学習者の意見文の捉え方ー学校教育における作文学習を背景に」 『国際日本研究』 Vol14, pp91-104。
- 村岡貴子・因京子・仁科喜久子 2009 「専門文章作成支援方法の開発に向けて : スキーマ形成を中心に」 『専門日本語教育研究』 第11号, pp. 23-30。
- 村岡貴子 2016 「アカデミック・ライティングの視点から見た大学における専門日本語教育」 『日本法教育研究センターにおける法学と日本語教育学の多元複層的なアーティキュレーション』 pp. 25-40。
- 山本菜穂子 2015 「日本語学習者の作文における「型」指導の効果と持続性ー意見文の場合ー」 『南山大学国際教育センター紀要』 第16号, pp. 31-41。
- 有吉英心子 1997 「日本語教育における作文指導の研究 : 中級レベルの就学生を対象とした場合」 『地域文化研究』 第一号, pp. 133-156。
- 渡部洋一郎 1992 「意見文産出考」 『人文科教育研究』 第19号, pp. 113-136。